

<b>3.4</b> [金]	<b>第22回 読響メトロポリタン・シリーズ</b> <b>東京芸術劇場コンサートホール／19時開演</b> The 22nd Yomikyo Metropolitan Series Friday, 4th March, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
<b>3.6</b> [日]	<b>第185回 東京芸術劇場マチネーシリーズ</b> <b>東京芸術劇場コンサートホール／14時開演</b> The 185th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series Sunday, 6th March, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／ユージン・ツイガーン Conductor EUGENE TZIGANE ..... **P.7**  
 ギター／<sup>バク キュヒ</sup>朴 葵姫 Guitar KYUHEE PARK ..... **P.10**  
 コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ビゼー 〈カルメン〉組曲から  
 “闘牛士”、“ハバネラ”、“間奏曲”、“アラゴネーズ”、  
 “闘牛士の歌”、“夜想曲”、“ジプシーの踊り” [約22分] ..... **P.11**

BIZET / Carmen Suite (Excerpts)  
 “Les Toréadors” “Habanera” “Intermezzo” “Aragonaise”  
 “Chanson du toréador” “Nocturne” “Danse bohème”

ファリャ 〈三角帽子〉第2組曲 [約12分] ..... **P.12**  
 FALLA / Three-Cornered Hat Suite No. 2

- I. 隣人たちの踊り (セギディーリャ)
- II. 粉屋の踊り (ファルーカ)
- III. 終幕の踊り

[休憩 Intermission]

ロドリゴ アランフェス協奏曲 [約21分] ..... **P.13**  
 RODRIGO / Concierto de Aranjuez

- I. Allegro con spirito
- II. Adagio
- III. Allegro gentile

ラヴェル ボレロ [約13分] ..... **P.14**  
 RAVEL / Boléro

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
 [助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）  
 [事業提携] 東京芸術劇場

<b>3.10</b> [木]	<b>第590回 サントリーホール名曲シリーズ</b> <b>サントリーホール／19時開演</b> The 590th Suntory Hall Popular Series Thursday, 10th March, 19:00 / Suntory Hall
<b>3.12</b> [土]	<b>第86回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ</b> <b>横浜みなとみらいホール／14時開演</b> The 86th Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series Saturday, 12th March, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮／ローター・ツァグロゼク Conductor LOTHAR ZAGROSEK ..... **P.8**  
 コンサートマスター／ダニエル・ゲーデ Concertmaster DANIEL GAEDE

ブラームス 悲劇的序曲 作品81 [約13分] ..... **P.15**  
 BRAHMS / Tragic Overture, op. 81

R.シュトラウス メタモルフォーゼン [約26分] ..... **P.16**  
 R. STRAUSS / Metamorphosen

[休憩 Intermission]

ブラームス 交響曲 第1番 ハ短調 作品68 [約45分] ..... **P.17**  
 BRAHMS / Symphony No. 1 in C minor, op. 68  
 I. Un poco sostenuto – Allegro  
 II. Andante sostenuto  
 III. Un poco allegretto e grazioso  
 IV. Adagio – Più andante – Allegro non troppo ma con brio

 ツァグロゼク氏からのメッセージ

東日本大震災から5年が経ちました。  
 71年前、R.シュトラウスは崩れゆく故郷の前に〈メタモルフォーゼン〉を作曲しました。  
 失われたかけがえのない命や日々を悼み、本日、〈メタモルフォーゼン〉を演奏します。  
 被災地の復興とみなさまの幸せを心からお祈りいたします。

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
 [助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）  
 [協力] 横浜みなとみらいホール (3/12)  
 〈サントリーホール30周年記念参加公演〉(3/10)



3.17 [木]

第556回 定期演奏会  
サントリーホール / 19時開演  
The 556th Subscription Concert  
Thursday, 17th March, 19:00 / Suntory Hall

指揮 / ローター・ツァグロゼク Conductor LOTHAR ZAGROSEK ..... P.8

コンサートマスター / ダニエル・ゲーデ Concertmaster DANIEL GAEDE

ベンジャミン ダンス・フィギュアズ (日本初演) [約16分] ..... P.18  
BENJAMIN / Dance Figures (Japan premiere)

コダーイ 組曲〈ハーリ・ヤーノシュ〉 作品15 [約25分] ..... P.19  
KODÁLY / Háry János Suite, op. 15

- I. 前奏曲、おとぎ話は始まる
- II. ウィーンの音楽時計
- III. 歌
- IV. 戦争とナポレオンの敗北
- V. 間奏曲
- VI. 皇帝と廷臣たちの入場

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン 交響曲 第3番 変ホ長調 作品55 〈英雄〉 [約47分] ..... P.20  
BEETHOVEN / Symphony No. 3 in E flat major, op. 55 "Eroica"

- I. Allegro con brio
- II. Marcia funebre. Adagio assai
- III. Scherzo. Allegro vivace
- IV. Finale. Allegro molto

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業)  
[協力] アフラック (アメリカンファミリー生命保険会社)  
(サントリーホール30周年記念参加公演)



3.24 [木]

第6回 東京オペラシティ名曲シリーズ  
東京オペラシティ コンサートホール / 19時開演  
The 6th Tokyo Opera City Popular Series  
Thursday, 24th March, 19:00 / Tokyo Opera City Concert Hall

指揮 / 小林研一郎 (特別客演指揮者)  
Special Guest Conductor KEN-ICHIRO KOBAYASHI ..... P.9

ピアノ / 田部京子 Piano KYOKO TABE ..... P.10

コンサートマスター / 小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

モーツァルト 歌劇〈フィガロの結婚〉序曲 [約4分] ..... P.21  
MOZART / "Le nozze di Figaro" Overture

モーツァルト ピアノ協奏曲 第20番 二短調 K. 466 [約30分] ..... P.22  
MOZART / Piano Concerto No. 20 in D minor, K. 466

- I. Allegro
- II. Romance
- III. Rondo. Allegro assai

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー 弦楽セレナード ハ長調 作品48 [約28分] ..... P.23  
TCHAIKOVSKY / Serenade for Strings in C major, op. 48

- I. Pezzo in forma di sonatina
- II. Walzer
- III. Elégie
- IV. Finale (Tema russo)

チャイコフスキー 大序曲〈1812年〉 作品49 [約16分] ..... P.24  
TCHAIKOVSKY / Overture solennelle 1812, op. 49

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

3.25 [金]

第13回 読響カレッジ  
文京シビックホール／20時開演 (19時30分から解説)  
The 13th Yomikyo College  
Friday, 25th March, 20:00 (Pre-concert talks from 19:30) / Bunkyo Civic Hall

指揮／小林研一郎 (特別客演指揮者)

Special Guest Conductor KEN-ICHIRO KOBAYASHI ..... P.9

ナビゲーター／中井美穂 Navigator MIHO NAKAI

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

リムスキー=コルサコフ 交響組曲〈シェエラザード〉 作品35 [約42分] ..... P.25

RIMSKY-KORSAKOV / Shéhérazade, op. 35

- I. 海とシンドバッドの船
- II. カランダール王子の物語
- III. 若い王子と王女
- IV. バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破



ナビゲーター  
中井美穂 Miho Nakai

アナウンサー。  
ロサンゼルス生まれ。1987～95年、フジテレビアナウンサーとして活躍。現在、「タカラヅカ・カフェブレイク」(TOKYO MXテレビ)、「松任谷正隆のディアパートナー」(FM東京)、舞台「スジナシBLITZシアター」にレギュラー出演。97年から「世界陸上」(TBS)のメインキャスターを務める。演劇コラムの執筆や、クラシックコンサートのナビゲーター・朗読も行っている。2013年から読売演劇大賞選考委員を務める。



〈シェエラザード〉 ソロ・ヴァイオリン  
小森谷巧 Takumi Komoriya (読響コンサートマスター)

桐朋学園ディプロマコースを経て、ウィーン国立音楽大学、その後英国へ留学。英国王立音大の演奏家ディプロマを首席で獲得し、帰国。リビッツァ・ヴァイオリンコンクール、フムル国際コンクールなどで入賞。欧州各地でソロ活動を展開し、高い評価を得る。1987年、東京交響楽団に入団しコンサートマスターとして活躍。91年、第1回出光音楽賞奨励賞を受賞。4枚のソリアルバムをリリース。99年、読響のコンサートマスターに就任。昭和音楽大学の教授及び国立音楽大学の講師を務めている。

※本公演には休憩がありません。あらかじめご了承ください。\*No intermission

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[共催] 文京シビックホール (公益財団法人文京アカデミー)

今月のマエストロ

Maestro of the month

## ユージン・ツィガーン

Eugene Tzigane

アメリカが誇る俊英  
スケールの大きな音楽で  
2度目の客演に期待

1981年生まれ、34歳のアメリカの俊英指揮者が、2年ぶりに読響に再登場する。今回はビゼー、ファリャ、ロドリゴ、ラヴェルのスペイン・フランス音楽のプログラムで鮮やかな棒さばきを披露する。

アメリカ人の父と日本人の母のもとに生まれる。ジュリアード音楽院でジェームズ・デプリーストに指揮を学び、2008年にゲオルク・ショルティ国際指揮者コンクールで2位に入賞し、国際的に注目を浴びた。ベルリン・ドイツ響やフランクフルト放送響に客演し、10～14年にはネルソンスの後を継いで北西ドイツ・フィルの首席指揮者を務めた。

11年にはアメリカでインディアナポリス響、12年には日本で東京都響を振ってデビューを飾った。またネーデルラント・フィルを指揮してアムステルダム・コンセルトヘボウにデビューするなど、欧



米や日本で幅広く活躍している。

オペラ・オペレッタでも、09年にバイエルン国立歌劇場でモーツァルトの〈コジ・ファン・トゥッテ〉、13年にフランクフルト歌劇場でJ.シュトラウスIIの〈こうもり〉を指揮して好評を博した。

最近ではリンツ・ブルックナー管、ノルウェー放送管、ラハティ響、バーゼル響などに客演している。読響では14年の《大阪定期》でマーラーの交響曲第1番〈巨人〉を振っており、今回が2度目の客演となる。

◇3月4日 読響マエストロリターンシリーズ

◇3月6日 東京芸術劇場マチネシリーズ

プログラム

特集

今後の公演案内

読響ニュース

# ローター・ツァグロゼク

Lothar Zagrosek

シンフォニーとオペラで定評あるドイツの名匠  
読響に初登場

オペラと20世紀作品を中心に幅広いレパートリーを誇るドイツの名匠が読響に初登場。今回は二つの交響曲、ブラームスの1番とベートーヴェンの3番〈英雄〉でドイツ音楽の真骨頂を聴かせてくれる。

1942年ドイツ生まれ。ウィーンでスワロフスキーに師事した後、ザルツブルクでカラヤンのアシスタントを務め、各地の歌劇場やオーケストラで腕を磨いた。80～90年代にかけてウィーン放送響やパリ・オペラ座、ライプツィヒ歌劇場の首席指揮者、音楽監督を歴任し、ミュンヘン、ベルリン、ドレスデン、ロンドンなどの歌劇場でも活躍した。

97年にシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督に就任し、ノーノやラッペンマンの現代オペラに加えてワーグナーの〈指環〉4部作などを指揮して絶賛された。また、ベルリン・フィル、ライプツィ



©Christian Nieling

ヒ・ゲヴァントハウス管、フランス国立管、モントリオール響、N響などに客演し、名声を確立した。最近ではロイヤル・コンサートヘボウ管を指揮してのベルク〈ルル〉などが話題を呼んだ。

録音ではデッカ・レーベルの「退廃音楽」シリーズのほか、ヒンデミットやメシアンなどの主要な作品を手がけている。また2006～12年に首席指揮者を務めたベルリン・コンツェルトハウス管とのベートーヴェン、シューベルト、ブルックナーなどのライブ録音も評価が高い。

- ◇3月10日 サントリーホール名曲シリーズ
- ◇3月12日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
- ◇3月17日 定期演奏会

# 小林研一郎

(特別客演指揮者)

Ken-ichiro Kobayashi

“炎のコバケン”  
チャイコフスキーの  
一大スペクタクルに挑む

読響特別客演指揮者である“炎のコバケン”が、得意とするチャイコフスキーの序曲〈1812年〉を披露する。壮大な音楽スペクタクルを盛り上げる豪快な“コバケン・サウンド”に注目だ。

1940年福島県いわき市出身。

東京芸術大学作曲科および指揮科を卒業。1974年、第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。ハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任。2002年5月の「プラハの春音楽祭」オープニングコンサートの指揮者に、東洋人として初めて起用されたほか、ハンガリー政府より民間人最高位の“星付中十字勲章”を授与された。11年に文化庁長官表彰を受けた。13年、旭日中綬章を受章。



©読響

現在、ハンガリー国立フィル、日本フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、九州響の首席客演指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学およびリスト音楽院（ハンガリー）名誉教授。12年7月からは、東京文化会館の音楽監督も務めている。

録音の分野においては現在、読響とブラームスの交響曲全集に取り組んでおり、《交響曲第1番／ハンガリー舞曲集》《交響曲第3番／シューベルト〈未完成〉》が発売され、絶賛を博している。

- ◇3月24日 東京オペラシティ名曲シリーズ
- ◇3月25日 読響カレッジ



パク キュ ヒ  
ギター 朴 葵姫

Guitar Kyuhee Park

次代を担うギター界の新星。1985年韓国生まれ。1歳から5歳まで日本で過ごし、3歳の時にギターを始める。幼少から多くのコンクールで入賞し、2004年に東京音楽大学に入学。06年からウィーン国立音楽大学でアルヴァロ・ピエッリに師事し、12年のアルハンブラ国際ギターコンクールをはじめ、ドイツ、ベルギー、ポーランドのコンクールで優勝した。日本では都響、京都市響、広島響、東京シティ・フィル、名古屋フィルなどと共演し、フォンテックとDENONから6枚のCDが出ている。

読響とは今回が初共演。

- ◇ 3月4日 読響メトロポリタン・シリーズ
- ◇ 3月6日 東京芸術劇場マチネーシリーズ



ピアノ 田部京子

Piano Kyoko Tabé

北海道生まれ。4歳からピアノを始め、田中希代子に師事。東京芸術大学を経て、ベルリン芸術大学に留学し、クラス・ヘルヴィッヒに師事。ミュンヘン国際音楽コンクールをはじめ、多くのコンクールで優秀な成績を収めた。これまでにバイエルン放送響、バンベルク響、ほか多数共演、アルバン・ベルク四重奏団やカルミナ四重奏団ほか世界のトップアーティストから共演者に指名されている。録音も多数あり、近年では下野竜也指揮、紀尾井シンフォニエッタ東京とのモーツァルトのピアノ協奏曲第20、21番 (DENON) が話題となった。

- ◇ 3月24日 東京オペラシティ名曲シリーズ

3.4 [金]

3.6 [日]

飯尾洋一 (いいお よういち)・音楽ライター

ビゼー  
〈カルメン〉組曲から

作曲：1873～74年／初演：1875年3月3日、パリ、オペラ＝コミック座 (原曲)／演奏時間：約22分

親しみやすい稀代の名作

ジョルジュ・ビゼー (1838～1875) の代表作といえば、なんといってもオペラ〈カルメン〉。スペインのセビリヤを舞台に、奔放なロマの女カルメンと竜騎兵の伍長ドン・ホセの破滅へと向かう恋が描かれる。物語はメリメの小説に基づく。「魔性の女」カルメンのイメージは広く一般に定着しているが、これはメリメの原作以上に、ビゼーのオペラの人気によるところが大きいだろう。全編にわたって、次々と親しみやすい名曲が登場する。

もっとも、〈カルメン〉が成功を収めたのは、作曲者の死後の話。初演の反応はおおむね冷淡で、ビゼーは失望したと伝えられる。初演から3か月後、

ビゼーは36歳の若さで世を去った。その後、ウィーン公演が大成功を収めたことをきっかけに、〈カルメン〉は稀代の名作として世評を高めていった。

作曲者の死後、フリッツ・ホフマンにより管弦楽用の第1組曲、第2組曲が編まれ、実演ではこれらから随意に抜粋して演奏されることが多い。本日は、第1幕への前奏曲の前半部分にあたる“闘牛士”、蠱惑的な“ハバナラ”、フルートのソロが印象的な“間奏曲”、情熱的な“アラゴネーズ”、ドン・ホセの有名なアリアによる“闘牛士の歌”、ミカエラのアリアによる“夜想曲”、エキゾチックな“ジプシーの踊り”の7曲が演奏される。

楽器編成／フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (トライアングル、タンブリン、シンバル、大太鼓)、ハープ、弦五部

# ファリヤ 〈三角帽子〉第2組曲

作曲：1917～19年／初演：1919年7月22日、ロンドン、アルハンブラ劇場（原曲）／演奏時間：約12分

## スペインの民話を題材に

マヌエル・デ・ファリヤ（1876～1946）はスペイン民族主義を代表する作曲家。この〈三角帽子〉や〈恋は魔術師〉といった地方色豊かで情熱的な曲想にあふれた作品で人気が高い。

1916年、ファリヤは興行師ディアギレフからロシア・バレエ団のために作曲を依頼される。ディアギレフはファリヤのピアノとオーケストラのための交響的印象〈スペインの庭の夜〉をバレエ化することを打診したが、ファリヤは他の題材を探したいとして、19世紀スペインの作家アラルコンによる民話に基づく小説〈三角帽子〉を提案し、これが実現した。初演時の舞台装置と衣装はパブロ・ピカソが担当した。

筋立ては南スペインのアンダルシアの町はずれを舞台に、代官が若い粉屋の妻に横恋慕した挙げ句に懲らしめられるというもの。〈三角帽子〉とは権威のシンボルとなる三つ角の立派な帽子を指す（子供のパーティなどで見かける円錐状のとんがり帽子ではない）。三角帽子を被っていばり散らす代官

が、なんとかして粉屋の女房をものにしてしようとするが、粉屋は機転を利かせて逆襲する。途中、代官と粉屋が衣裳を交換する羽目になり、人違いによる嫉妬やドタバタが起きるなど、どこかモーツァルトの〈フィガロの結婚〉を連想させる。

全曲から聴きどころを抜粋して、演奏会用に第1組曲、第2組曲が編まれている。第2組曲では第2幕の“隣人たちの踊り”、“粉屋の踊り”の一部、“終幕の踊り”が抜粋される。

“隣人たちの踊り”（セギディーリヤ）  
聖ヨハネ祭の夜、近所の人々が集まり酒を飲み、踊りに興じる。流れるような主題と躍動感あふれるリズムのコントラストが鮮やか。

“粉屋の踊り”（ファルーカ）  
酒宴で踊りを促されて、粉屋はフラメンコの舞曲ファルーカを踊り出す。歯切れのよいリズムに乗った力強いダンス。

“終幕の踊り”  
代官を退散させて喜ぶ粉屋の夫婦と村人たち。華麗な管弦楽法によって喜びを爆発させる。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、カスタネット、シンバル、小太鼓、銅鑼、トライアングル、シロフォン）、ハーブ、ピアノ、チェレスタ、弦五部

# ロドリーゴ アランフェス協奏曲

作曲：1939年／初演：1940年11月9日、バルセロナ／演奏時間：約21分

## 貴族的かつ民衆的な土地の面影

ホアキン・ロドリーゴ（1901～1999）はスペイン東部の町サグントに生まれ、バレンシアとパリで学んだ作曲家。1936年から39年にかけてのスペイン内戦の間はパリとドイツに住み、39年に帰国してマドリードを拠点に活動した。この〈アランフェス協奏曲〉は内戦が終わったばかりの40年に発表された。ギター奏法について知識の乏しかったロドリーゴは、作曲にあたってマドリード王立音楽院教授を務めたギタリスト、レヒーノ・サインス・デ・ラ・マーサから助力を得ている。デ・ラ・マーサの独奏による初演は大きな成功を収め、以降、ギター協奏曲を代表する名作として愛奏されることとなった。

曲名のアランフェスとは、マドリード州南部の緑豊かな景勝地で、スペイン王宮の離宮や庭園で知られる。ロドリーゴは若き日に夫人とともにこの土地を訪れており、その思い出に触発されて作品が書かれた。3歳で失明したロドリーゴが壮麗な王宮の景観を目に

することはなかったが、風にそよぐ草木や花の香り、鳥のさえずりから土地の印象を刻んだことだろう。アランフェスの歴史に思いを馳せながら、「貴族的な要素と民衆的な要素がひとつに溶け合っていたスペインの面影を作品に描こうとした」と作曲家は語っている。

**第1楽章** アレグロ・コン・スピリト  
軽快で活発なリズムが一貫し、スペイン情緒を漂わせる。

**第2楽章** アダージョ イングリッシュ・ホルンによる切なく甘美な主題はあまりに有名。「恋のアランフェス」などポピュラー音楽におけるカバー例も数多い。後半のギター独奏によるカデンツァも聴きどころ。後年、作曲者が明かしたところによれば、このアダージョにはアランフェスを訪れた当時、最初の子を流産して間もなかった夫人への慰めが込められているという。

**第3楽章** アレグロ・ジェンティーレ  
朗らかで心地よいロンド。ギターとオーケストラの掛け合いが楽しい。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、弦五部、独奏ギター

# ラヴェル ボレロ

作曲：1928年／初演：1928年11月22日、パリ・オペラ座／演奏時間：約13分

## 多彩な音色 リズムの反復で描き出す

フランスの作曲家モーリス・ラヴェル（1875～1937）はスペイン国境近くのバスク地方に生まれた。母親はバスク系である。生後すぐにパリに移って生粋のパリジャンとして育ったラヴェルだが、スペイン文化への愛着は強く、スペインを題材にした作品をいくつも残している。最大の人気作〈ボレロ〉もそのひとつ。ロシア生まれの名舞踏家イダ・ルビンシテインが、自らが主宰するバレエ団のためにスペイン的な作品を依頼したことから作曲された。

ボレロとはスペイン舞曲の一種のこと。冒頭よりボレロのリズムを小太鼓が延々と刻み、異国風の主題がひたすら繰り返される。リズムもメロディも反復されるばかりだが、曲は決して単調にならず、むしろ多彩な表情を見せる。まずフルートで奏でられた主題は、次にクラリネット、さらにファゴット、エスクラリネット、オーボエ・ダモーレ、フルートとトランペット……と次々と受け渡され、音色を変化させてゆく。珍しいトロンボーン

のソロなど管楽器の名技は聴きどころ。後半は弦楽合奏も加わり、音の厚みを増して壮麗なクライマックスを築きあげる。

ラヴェルは作品についてこのように述べている。

「誤解のないように望みたいのですが、〈ボレロ〉は非常に特殊な実験であり、それ以上のことを目指したと思われては困ります。作品はゆるやかで大きな長いクレッシェンドできています。曲にはコントラストがなく、プランや演奏の方法以外にはなんの創意もありません。主題は没个性的で、お決まりのスペイン＝アラブ風のもので。逆のことを言われるかもしれませんが、オーケストラの扱いは簡素かつ明快で、名人芸を目指したところは微塵もありません」。

半ば本心でもあるだろうが、半ば自信の裏返しとも思える言葉でもある。作曲者の予想に反して、作品は爆発的な成功を収め、ラヴェルの名声を一躍国際的に高めることになった。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2（オーボエ・ダモーレ持替）、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ソプラノサクソフォン、テナーサクソフォン、ホルン4、ピッコロトランペット、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、小太鼓、銅鑼）、ハープ、チェレスタ、弦五部

3.10 [木]

3.12 [土]

船木篤也（ふなき あつや）・音楽評論

## ブラームス 悲劇的序曲 作品81

作曲：1880年夏／初演：1880年12月26日、ウィーン／演奏時間：約13分

## 〈大学祝典〉とセットで心情を表現

音楽史でロマン派とよばれる時期のど真ん中。1853年、ロベルト・シューマンのあと押しを得て、ヨハネス・ブラームス（1833～1897）が20歳で世に紹介された時、彼には管弦楽曲がまだなかった。その方面へとシューマンに鼓舞され、最初にもしたのはピアノ協奏曲第1番（1858）。管弦楽のパートは、人の助けを得て仕上げた。そして〈ドイツ・レクイエム〉（1868）の成功が突破口となり、43歳のときに交響曲第1番を完成。これから聴く〈悲劇的序曲〉はその4年後、1880年夏の作である。初演は同年12月26日、ウィーンにて。

「序曲」には、オペラなど劇音楽の冒頭に置かれるものと、コンサート用の単独曲として書かれるものがあるが、本作は後者にあたる。完成がほぼ同時期であることから、〈大学祝典序曲〉の姉妹編とみ

なされることが多い。ブラームス自身、「とても愉快な」〈大学祝典〉を書いたついでに「私のメランコリックな心性をも満足させてやりたかったのだ」と述べているので、そういう見方になるのだろう。

ただ、本作のスケッチの一部はすでに1860年代終わり頃に書かれており、この発言を鵜呑みにすることはできない。両序曲をセットで世に知らしめるべく、姉妹編に見せかけたというのが事の真相かもしれない。

叩きつけるような二つの和音で始まるが、この時点ではこれが二短調なのかイ短調なのか判然としない。この宙吊り状態はしばらく続き、20小節も経ってから二短調が確定する。もがくような楽想展開、歯を食いしばるがごとき付点リズムの多用は、たしかに「悲劇的」のイメージにぴったりだ。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

## R.シュトラウス メタモルフォーゼン

作曲：1945年／初演：1946年1月25日、チューリヒ／演奏時間：約26分

### ドイツ文化の喪失に哀悼の念込める

リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）は、ワルツ王のシュトラウス家とは無関係。父はミュンヘン宮廷歌劇場のホルン奏者で、ベートーヴェンも文豪ゲーテもまだ生きている頃に生まれ、ワーグナー作品の初演にも関わった人だ。その息子であるリヒャルトは、日本でいえば昭和24年まで生きたのである。第二次大戦中の次のような発言を、どう読むべきか。

「絶望的な気分だ。ゲーテの家が、世界最大の聖なる場所が、破壊されたのだ！ 我がうるわしのドレスデン、ワイマール、ミュンヘン。すべてが台無しになった！」

シュトラウスにとってドイツは、なによりも文化の国、なかならず音楽の国であり、それが政治の野蛮によって息の根を止められてしまった——ナチス・ドイツ当局と、一時的にはあれ「帝国音楽局総裁」として関わっただけに、<sup>じくじ</sup> 忸怩たる思いであったろう。

〈メタモルフォーゼン（変容）〉は、終戦直前の1945年3月から4月にかけて作曲された。交響詩とオペラで大管弦

楽を駆使してきたシュトラウスが、ここでは弦楽器だけを用いている。ただし、ヴァイオリンは10、ヴィオラは5、チェロは5、コントラバスは3パートに分かれており、副題を「23の独奏弦楽器のための習作」という。

本作に、大切な文化——あるいは彼自身？——が喪われてしまったことへの哀悼の念が込められていることは間違いない。それというのも、最後にベートーヴェンの英雄交響曲からの引用（第2楽章“葬送行進曲”のテーマ）が現れ、楽譜のそこに「イン・メモリアム！」と記されているからだ。

全体は、誤解を恐れずにいえば、「逆さ変奏曲」とみなせる。最初にベートーヴェンのテーマの対旋律を疑似テーマとして示し、そのさまざまな変容態<sup>ひっせい</sup>を植物の蔓<sup>つる</sup>のごとく密接に絡みあわせ展開。そして最後に、本当のテーマ、すなわち英雄交響曲のテーマを明かす、という具合だ。メタモルフォーゼンの語は、動植物学にも心血を注いだゲーテの「形態学（モルフォロジー）」と関係するかもしれない。

楽器編成／ヴァイオリン10、ヴィオラ5、チェロ5、コントラバス3

## ブラームス 交響曲 第1番 ハ短調 作品68

作曲：1862年～1876年（最終稿1877年）／初演：1876年11月4日、カールスルーエ／演奏時間：約45分

### ベートーヴェン模範に可能性追求

ブラームスが管弦楽法をじっくりと身につけていったことは先に記した。交響曲第1番の完成にはことのほか慎重で、最初の構想から15年近くかかっている。なぜそんなにかかったのか？

よく言われるように、「ベートーヴェンの交響曲」という模範が、大きなプレッシャーとなっていたことは確かであろう。注目すべきは、ブラームスとその模範から、決して逃げようとしなかった点である。モチーフ、テーマ、リズム、音程などを構築的・組織的に扱った古典的4楽章制の交響曲に、さらなる可能性はあるか。そこを追求していったのである。

本作が（とりあえずの）完成をみた1876年夏という時期にも注目しよう。これはちょうど、ワーグナー<sup>ひっせい</sup> 畢生の大作〈ニーベルングの指環〉がバイロイト祝祭劇場で初演された夏である。楽劇のほうにいくことで、いわばベートーヴェン・プレッシャーをかわしたワーグナーへの、対抗意識もあったのではないか。

第1楽章からしてすでに、動機の組

織的活用は、目もくらむほど密である。ほんの一例を挙げるなら、スローな序奏で低音楽器が<sup>しつよう</sup> 執拗に打ち込んでゆく3連音。これは、のちにくる主部の3連音（第2ヴァイオリンとヴィオラが刻む）の先取りとみなせる。主部全体の勢いは、この3連音の運動によって支えられている。

第2楽章は、ゆったりとした歌謡的な楽章。短調になってオーボエの連綿たる旋律が展開するが、第3楽章でクラリネットが吹く主題には、その余韻が認められよう。

一方で、遊びも忍ばせているのが面白い。第4楽章のアルペンホルン風の旋律は、ブラームスがクララ・シューマン（恩師の妻でピアニスト・作曲家）に送った旅の便りに記した旋律と同じ。そのハガキには、「山の頂きから、深き谷間から、あなたに贈ります、幾千もの挨拶を」という歌詞があった。つまりは、「人生楽あれば、苦もありますが、私はあなたを……」というメッセージなのだ。ブラームスはクララを愛していた。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部



ベンジャミン  
ダンス・フィギュアズ

作曲：2004年／初演：2005年5月19日、シカゴ／演奏時間：約16分

「舞踏」を構想した九つの小品

現代イギリスを代表する作曲家ジョージ・ベンジャミン (1960～) は、その早熟の才能が認められて1976年からパリ音楽院のメシアンクラスのクラスで学び、78年からはケンブリッジのキングズ・カレッジでゲールに師事した。初めての管弦楽作品〈平らな地平線に囲まれて〉(1978～79) が、イギリス最大の音楽祭「プロムス」で最年少作曲家の作品として紹介され、その名は広く知られるようになった。その後、ブレーズしょうへいの招聘により IRCAM (フランス国立音響音楽研究所) でコンピュータを用いた作曲に取り組んだ。多作ではないが、一作ごとに研ぎ澄まされた感覚で洗練された音楽を作り出し、文学やその他の芸術ジャンルから触発された作品も少なくない。最近では、2作目のオペラ〈Written on Skin〉(2012) が大きな話題を集めた。

〈ダンス・フィギュアズ〉は、ベルギーの振付師アンヌ・テレサ・ドゥ・ケスマイケルのダンス作品のために構想された (2006年初演)。管弦楽版は、それに先立ちパレンボイム指揮のシカゴ響によって初演された。全体は、1分～3分半の九つの小品で、ほぼ切れ目なく演奏される前半6曲と後半3曲の2部分で構成される。第1曲“Spell” 弦楽器でひそやかに始まる。第2曲“Recit” 管楽器の息の長い装飾的な旋律が印象的。第3曲“In the Mirror” 前半と後半で性格が異なる。第4曲“Interruptions” 様々な素材の断片が現れる。第5曲“Song” 流れるような音楽。第6曲“Hammers” リズムが炸裂する。第7曲“Alone” ほの暗い響きが広がる。第8曲“Olicantus” 静かな音楽がゆっくり進む。第9曲“Whirling” 力強く旋回する。

楽器編成／フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2 (エスクラリネット、バスクラリネット持替)、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (ギロ、ラチェット、銅鑼、大太鼓、グロッケンシュピール、木魚、シンバル、アンベル、釣り用リール、カウベル、ヴィブラフォン、ムチ、ヴィブラスラップ、小太鼓、タン布林、ログドラム、アラームベル)、ハーブ、チェレスタ、弦五部

コダーイ  
組曲〈ハリー・ヤーノシュ〉 作品15

作曲：1925～27年 (舞台版)、1952年 (舞台版改訂) /  
初演：1926年10月16日ブダペスト (舞台版初演) / 演奏時間：約25分

ハンガリーの冒険物語いきいきと

ゾルターン・コダーイ (1882～1967) は、バルトークと並ぶ20世紀ハンガリーを代表する作曲家。1905年からバルトークと共同でハンガリー民謡の採譜と録音を行い、その研究は、後の彼の創作にも大きな影響を与えた。

〈ハリー・ヤーノシュ〉は、実在したとされる人物の話に基づく舞台作品。ハンガリーでは誰もが知る物語の主人公ハリーは、19世紀初頭にオーストリア帝国軍に従軍したのち故郷に戻り、様々な手柄話を面白おかしく語った。ナポレオンを打ち負かしたとか、皇帝の娘と結婚寸前までいったとか……。すべて空想の話だが、それをもとに台本が作られ、ハンガリー語のオペラ (正確にはジングシュピール) として作曲された。ハリーの四つの冒険が繰り返されるこの作品は、1926年に初演されたが、翌年に追加や修正が加えられ、さらなる書き直しを経て、1952年に最終稿が完成した。

組曲版は、初演を観たバルトークの提案で作られたとされるが、詳細は明

らかではない。しかし、物語を描くいきいきとした魅力的な音楽で、コダーイの代表作のひとつになっている。

第1曲“前奏曲、おとぎ話は始まる” 大きくしゃみの音楽で始まる。これは「聞いている者がくしゃみをすれば本当の話」というハンガリーの言い伝えに由来する。第2曲“ウィーンの音楽時計” 調子のよい旋律が有名なこの曲は、第2の冒険で登場する。第3曲“歌”<sup>めいそう</sup> 瞑想的なヴィオラ独奏で始まり、独奏楽器が民謡に基づく美しい歌を歌い継ぐ。ハンガリーの民族楽器ツインパロムの独特の響きが味わい深い。第4曲“戦争とナポレオンの敗北” 第3の冒険でナポレオンはハリーにひざまず 跪いた。ラ・マルセイエーズ風の旋律も聴こえる。第5曲“間奏曲” 第1と第2の冒険をつなぐ間奏曲。ヴェルブンコシュ (ハンガリーの募兵活動で使用された踊り) の旋律が用いられる。第6曲“皇帝と廷臣たちの入場” 第4の冒険はウィーンの宮殿での結婚式の場面。にぎやかな音楽で盛り上がる。

楽器編成／フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2 (エスクラリネット持替)、ファゴット2、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット3、ホルネット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (シロフォン、タン布林、鐘、グロッケンシュピール、小太鼓、トライアングル、シンバル、大太鼓、銅鑼)、ツインパロム、チェレスタ、ピアノ、弦五部

# ベートーヴェン 交響曲 第3番 変ホ長調 作品55 〈英雄〉

作曲：1803～1804年／初演：1805年4月7日、ウィーン／演奏時間：約47分

## ナポレオンの「思い出」に捧げられた作品

1802年5月から半年間、ウィーン郊外のハイリゲンシュタットに滞在したルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は、その地で遺書をしたためた。そこから難聴に苦しみ、絶望する様子も読み取れるが、それは死へ向かう言葉ではなく、苦難を克服した者の力強い決意でもあった。

ウィーンに戻ってきたベートーヴェンは、書き溜めたスケッチをもとに創作に没頭する。ピアノ協奏曲第3番、ヴァイオリン・ソナタ第9番〈クロイツェル〉、ピアノ・ソナタ〈ヴァルトシュタイン〉など、次々と傑作が生み出された。これらに続く交響曲第3番は、全体の構成も音楽的発想も従来の交響曲にはない革新的な内容をもつ。作品規模は大きくなり、長調の交響曲としては異例の短調の緩徐楽章が置かれ、終楽章は変奏曲となった。

フランス革命の精神でもある共和主義を信奉していたベートーヴェンは、1歳年長のナポレオン・ボナパルトを人間の自由と解放の象徴とみなし、「ボナパルト」と題名を付けて、この交

響曲を捧げようとした。しかし、ナポレオンが皇帝に即位したことを聞くと激怒し、表紙を破って楽譜を叩きつけた。その後、「英雄交響曲」と題名が改められ、「ひとりの偉大な人物の思い出を記念して」と書き添えられた。

**第1楽章**（アレグロ・コン・ブリオ）ソナタ形式。勇壮な和音で開始され、朗々と歌われる第1主題と穏やかな第2主題が展開する。再現部の後に提示部に匹敵するほどの長大な終結部（第2展開部の性格ももつ）が続く。

**第2楽章** 葬送行進曲（アダージョ・アツサイ）弦楽器が静かに歩みを進め、中間部ではハ長調に転調し、対比的な効果を生み出す。

**第3楽章** スケルツォ（アレグロ・ヴィヴァーチェ）軽やかな主部に対して、中間部（トリオ）の3本のホルンの合奏は、この交響曲の聴きどころのひとつである。

**第4楽章** フィナーレ（アレグロ・モルト）は、1801年に作曲したバレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉の終曲に基づく、明るく力強い変奏曲。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦五部

3.24 [木]

道下京子（みちした きょうこ）・音楽評論家

## モーツァルト 歌劇〈フィガロの結婚〉序曲

完成：1786年4月29日、ウィーン／初演：1786年5月1日、ウィーン／演奏時間：約4分

### オペラへの期待感かきたてる

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は生地ザルツブルクでは大司教に仕え、宮廷音楽家として活躍していたが、大司教と決裂してザルツブルクを離れて1781年にウィーンへ移り住む。その翌年、コンスタンツェ・ウーバー（作曲家カール・マリア・フォン・ウーバーのいとこ）と結婚した。ウィーンに暮らし始めた頃は、ピアノ協奏曲の創作や演奏で注目されたものの、1780年代半ばを過ぎる頃から予約演奏会の予約者が減少し、経済状況は悪化してゆく。歌劇〈フィガロの結婚〉は、まさにその頃の作品で、1786年にウィーンで初演される。

この歌劇の原作は、フランスの作家ボーマルシェの戯曲である。当時、彼の戯曲は貴族制度を批判するものとされ、厳しい検閲の対象となった。台本

作家のダ・ポンテは、この戯曲の政治的な内容を薄め、オペラにふさわしい台本構成を行い、皇帝の許可を得て上演にこぎつけた。

理髪師フィガロのとりなしにより、ロジーナとの結婚を果たしたアルマヴァイーヴァ伯爵。ところが結婚生活に飽きてしまった伯爵は、フィガロとの結婚が決まっていた小間使いスザンナに、手を出そうと企む。結果的に、伯爵は自らの非を詫言（たぐら）びて伯爵夫人にも許しをもらう。そして、フィガロとスザンナはハッピーエンドで幕を閉じる。

本日演奏されるのは、この歌劇の幕が開く前に披露される序曲（ニ長調2分の2拍子）である。この序曲の主要主題は、せわしく動くモチーフに導かれるように現れる。オペラの物語への期待に、胸ときめかせるような素晴らしい序曲である。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

# モーツァルト ピアノ協奏曲 第20番 ニ短調 K.466

完成：1785年2月10日、ウィーン／初演：1785年2月11日、ウィーン／演奏時間：約30分

## 短調でドラマティックな表現を求めて

1781年からウィーンで生活を始めたモーツァルトは、生徒へのレッスンはじめ、予約演奏会を開催し、ピアノ協奏曲を自作自演するなどして生計を立てていた。ピアノ協奏曲第20番も、予約演奏会のために書かれた作品である。

モーツァルトは20曲以上のピアノ協奏曲を完成させているが、短調で書かれているのは第20番と第24番の2曲のみである。古典派の時代では、協奏曲は長調で作曲されることが多かった。彼は、明朗で軽快な当時の作品様式に飽き足らず、この作品のなかで新しい協奏曲の表現を追求している。この曲のように、ドラマティックで内容に富んだ協奏曲は、18世紀後半では他に類を見ない。

この曲は1785年2月11日、市の集会場メールグラーベで開かれた満席の予約演奏会で、モーツァルト自らピアノを弾いて初演された。協奏曲には、独奏者が卓越した演奏技巧を披露するカデンツァが含まれており、作曲家自身がカデンツァを作曲したり、書き残

しているケースも多い。モーツァルトは、第20番のピアノ協奏曲のカデンツァを書き残していないものの、この曲を好んで演奏したベートーヴェンやブラームスをはじめ、多くの音楽家がこのカデンツァを作曲している。

**第1楽章** アレグロ ニ短調 4分の4拍子。協奏的ソナタ形式。ヴァイオリンとヴィオラの刻むシンコペーションのリズムは、揺れ動くような音の畝を生み出すとともに、切迫感をもたらす。そこから導かれるように現れる独奏ピアノは、メランコリックな情感を漂わせる。

**第2楽章** ロマンズ 変ロ長調 2分の2拍子。ピアノが甘美に奏でる主旋律を、他の楽器が模倣してゆく。三部形式に基づき、ト短調の中間部では曲想は一変し、嵐のように激しい音楽が繰り広げられる。

**第3楽章** アレグロ・アッサイ ニ短調 2分の2拍子。ドラマティックなピアノ独奏に始まるロンド楽章。コーダでニ長調に転じ、音楽は誇らしげに結ばれる。

楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

# チャイコフスキー 弦楽セレナード

完成：1880年10月26日／初演：1881年10月30日、 Санктペテルブルク／演奏時間：約28分

## モーツァルトへの敬意も込めた作品

ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）は親の希望もあり法学校に学び、その後法務省に勤務する。しかし、音楽への情熱を捨て切れずに法務省を退職し、アントン・ルビンシテインが Санктペテルブルクに創設した音楽学校に学んだ。卒業後はアントンの弟、ニコライがモスクワに開いた音楽学校へ作曲の教員として赴任。彼は、ルビンシテイン兄弟の推進するヨーロッパの音楽をもとに作曲を進めてゆく。その一方で、1868年には「ロシア5人組」のひとり、バラキレフと出会い、民族的な表現についても示唆を得た。

その後、チャイコフスキーは1870年代後半からロココ様式の音楽へと傾倒してゆき、1875年作曲の〈憂うつなセレナード〉など古典的な楽想の創作を手掛けた。1880年作曲の〈弦楽セレナード〉も、古典派の音楽様式を土台としている。

**第1楽章** ソナチネ形式の小品 アンダンテ・ノン・トロppo～アレグロ・モデラート ハ長調 8分の6拍子。主調はハ長調であるが、序奏には厚み

を帯びたイ短調の和音が連なっている。つづくハ長調の主部では、大らかに歌い上げられる第1主題と軽快な第2主題を軸に音楽は展開する。チャイコフスキーは「第1楽章は私のモーツァルトへのオマージュです」との言葉を残している。

**第2楽章** ワルツ モデラート：テンポ・ディ・ヴァルス ト長調 4分の3拍子。チャイコフスキーはワルツの創作を得意としており、このワルツにも彼のロココ趣味が発揮されている。

**第3楽章** エレジー ラルゲット・エレジアーコ ホ短調 4分の3拍子。全体的に音楽は陰りを帯びている。この陰影も、チャイコフスキーの音楽の魅力である。

**第4楽章** フィナーレ（ロシアの主題）アンダンテ ト長調 4分の2拍子～アレグロ・コン・スピリト ハ長調。序奏は弱音器をつけて静かに始まる。主部の主要なモチーフが示されたのち、ゲネラル・パウゼ（全休止）を挟んで弾むような主部に入る。ここではロシア民謡が用いられている。

楽器編成／弦五部

# チャイコフスキー 大序曲〈1812年〉

完成：1880年11月19日／初演1882年8月20日、モスクワ／演奏時間：約16分

## 露軍のナポレオン撃退をテーマに

1880年にモスクワで行われる博覧会のために、チャイコフスキーは博覧会の芸術監督を務めていた恩師、ニコライ・ルビンシテインから管弦楽曲の創作を依頼された。この企画は、モスクワの救世主キリスト大聖堂の建設の記念と、1812年の祖国戦争（ナポレオンのロシア遠征において、劣勢を強いられていたロシア軍が勝利した）をテーマとしていた。序曲〈1812年〉の作曲は1880年9月末から始められ、ほぼひと月で完成するものの、博覧会は延期。結局、この作品が初演されたのは1882年である。

曲は、三つの部分で構成されている。まずラルゴ（変ホ長調 4分の3拍子）において、ロシア正教の聖歌「主よ、汝の民を救いたまえ」の旋律を低弦楽器が表す。音楽は徐々に高揚してゆき、低弦楽器とファゴットによる重々しいユニゾンの後、第2の部分（アンダンテ 変ホ長調 4分の4拍子）に入る。木管楽器とホルンが、軽快なリズムを持つ主旋律を奏でる。

第3の部分（アレグロ・ジュスト 変ホ短調 4分の4拍子）が、この作品の主部である。ソナタ形式に基づいており、第1ヴァイオリンが急速な主要主題を提示する。その後、フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」の旋律が奏でられるが、これはナポレオン軍の侵攻を表現している。嬰へ長調の民謡ふうの第2主題、そして再び変ホ短調に転じたのち、ロシア民謡「門」を引用した第3主題が現れる。フランス国歌をホルネットとトランペットが演奏するなか、チャイコフスキーは大砲を鳴らす指示をしている。この場面は、ロシア軍がナポレオン軍を撃退する様子を描いているもので、コンサートホールでは大砲の音は大太鼓などで代用される。

演奏には、合唱が用いられることもあるが、作曲家による初版譜には合唱の記載はない。この作品についてチャイコフスキーは「民族愛あふれる中程度の作品」と評価しており、作品が自分の予想以上に大評判を博したことに戸惑ったと言われている。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ホルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タンブリン、鐘、大砲）、バンダ（トランペット4、トロンボーン4）、弦五部

読響カレッジ



3.25 [金]

柴田克彦（しばた かつひこ）・音楽ライター

## リムスキー＝コルサコフ 交響組曲〈シェエラザード〉 作品35

作曲：1888年／初演：1888年11月3日、ベテルブルク（現サンクトペテルブルク）／演奏時間：約42分

### ロシア国民楽派の大御所

ニコライ・リムスキー＝コルサコフ（1844～1908）は、ロシア国民楽派の総決算的な役割を果たした作曲家です。国民音楽の確立を目指して集まったバラキレフら「ロシア5人組」（正確には「力強い仲間」）の最年少である彼は元々、大半のメンバーと同様に、音楽とは別の職業をもつディレタントでした。

ベテルブルクから200キロ東のティフヴィンに生まれ、幼少から楽才を示しながらも、海軍兵学校に入学。在学中にバラキレフの指導のもとで交響曲を書きますが、1862年卒業後は海軍士官になり、遠洋航海にも出るなど、軍籍のまま音楽を続けました。しかし1871年、ベテルブルク音楽院の作曲と管弦楽法の教授に就任。そのとき体系的な知識の欠落を痛感し、和声や対位法を勉強し直しています。

また、しばらくは海軍にも在籍して

軍楽隊長を務め、1880年代以降は〈スペイン奇想曲〉〈シェエラザード〉などの管弦楽曲や数々のオペラを作曲。1905年の第一次ロシア革命直後には政治的な理由で教授を解任されましたが、多くの人の働きかけで復職し、約35年の在任中に、グラズノフ、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ等々（イタリアのレスピーギも彼に師事）、次代のロシア音楽の担い手たちを育てました。

“管弦楽法の大家”と称された彼は、色彩感豊かなオーケストレーションによる前記の傑作や、15作のオペラなどを発表。創作面や教育面の業績に加えて、ムソルグスキーのオペラ〈ボリス・ゴドゥノフ〉の改訂、同じく交響詩〈はげ山の一夜〉やボロディンのオペラ〈イーゴリ公〉の補作完成など、国民楽派の総決算と呼ぶに相応しい功績を残しています。

## 色彩豊かなペルシャ民話の世界

〈シェエラザード〉は、作曲者の看板曲にしてロシアを代表する管弦楽曲です。

シェエラザードとは、「千一夜物語（アラビアン・ナイト）」の語り部の名。「夜を共にした処女を翌朝殺すシャーリアール王に、千一夜にわたって物語を聞かせ、残忍な心を消してしまった」

女性で、彼女が話す物語はペルシャ（トルコ）の民話に基づいています。

本作では、冒頭の力強いシャーリアール王の主題と、独奏ヴァイオリン（通常はコンサートマスターが演奏。要注目）による優美なシェエラザードの主題が全

楽章に登場しながら、四つの物語が展開されます。ただ作曲者は最終的に各タイトルを外し、自由な想像の余地も残しています。

曲は、様々な楽器のソロを効果的に用いた色彩的なサウンドによる、オリエンタリズム濃厚な音楽。また、見事な海の描写には海軍時代の経験が生かされています。

**第1楽章** “海とシンドバッドの船”  
ラルゴ・エ・マエストロソ～アレグロ・

ノン・トロppo。二人の主題の提示後、船の動きを表す和音的な主題が登場。フルートがシンドバッドの旋律を奏で、危険な航海へと進みます。

**第2楽章** “カランダール王子の物語”  
レント～アンダンティーノ。カランダール（巡礼僧）王子の諸国遍歴の物語。

ファゴットで出されるのが王子の主題です。中間部では、ファンファーレ風の音型に基づく動的な音楽が展開。

**第3楽章** “若い王子と王女”  
アンダンティーノ・クアジ・アレグレット。  
ノスタルジックな主題を軸にした愛の情景。

クラリネットが出す快活な主題が加わって次第に熱を帯びます。

**第4楽章** “バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破”  
アレグロ・モルト。二人の主題の後、フルートで出される祭りの主題をもとに激しさを増していきます。第1楽章の海の音楽が再現されて嵐となり、船は難破。シェエラザードの主題と柔和になった王の主題が溶け合いながら、静かに終結します。

